

子どもの心身の問題予防

鳴教大開発 授業で成果

いじめ、暴力による学校不登校やうつ病、生活習慣病など子どもを抱える心身の問題を未然に防ぐ予防教育の効果を高めようと、鳴門教育大学予防教育科学センターが開発した独自のプログラムが目を集めている。県教委は013年度、鳴門、阿南、北島、藍住の2市7町の小学校をモデル校として指定し、このプログラムに基づき授業を推進。いじめが社会問題化したこともあり、県外の教育関係者からの視察が相次いでいる。

「とてもかっこいいサッカークラッシュ」をテーマにした授業で、子どもたちが抱える心身の問題を未然に防ぐ予防教育の効果を高めようと、鳴門教育大学予防教育科学センターが開発した独自のプログラムが目を集めている。県教委は013年度、鳴門、阿南、北島、藍住の2市7町の小学校をモデル校として指定し、このプログラムに基づき授業を推進。いじめが社会問題化したこともあり、県外の教育関係者からの視察が相次いでいる。

楽しみながら自信育む 保健室登校から復帰も



鳴門教育大学が開発した予防教育プログラムで授業を行う黒崎小教諭(右)と同大予防教育科学センターのスタッフ(左)鳴門市の同小

たプログラムを作成。県内の小中学校で授業をしながら改良を加えてきた。「理論に裏打ちされた科学的な方法論」(センター所長の山崎勝之教授)とす

るプログラムは、小学3年から中学1年までを対象としている。自己信頼心(自信)の育成、感情の理解と対処の育成、向社会性の育成、ソーシャルスキルの育成の4分野から成り、1分野につき8時間、1年間で32時間の授業を行う。最大の特徴は、子どもを授業に引きつけ、生き生き

とした感情を引き出す工夫が随所に凝らされていること。黒崎小の教室にあつたスクリーンもそうした工夫の一つだ。

発達段階に応じた短いアニメ映像が映し出され、この物語に沿って授業は進行していく。グループや個人で意見を発表する際にもゲームで発表者を決め、な

ら実際に教育効果が上がったことを裏付けるデータもある。10年度からの3年間に県内17校でプログラムの授業を受けた小中学生に対してアンケートを行い、回答を統計処理したところ、「健全な自信が身に付いている」の出張授業も行い、毎回がある。

山崎教授は「今はセンターの子どもが教室に戻るようになった」「グループでの作業がしっかりとできるようになった」などの報告も寄せられた。6、7月に授業を行った。

「これで終わり? もう一回やりたい」。11、12月に鳴門市の黒崎小が取り組んだ予防教育授業の最終日、1人の児童が教員に投げかけた言葉だ。そんな声が出るのも当然と思えるほど、授業は活気にあふれるも

記者の目

「健康をむしむ問題に対して、

いじめや不登校 解決期待

「学校現場では予防という視点からの教育が手薄」と山崎教授は指摘する。「いじめはためこみ行動を制限しても一時的に抑止力が働かなくなる。個人の性格に踏み込まなければ抜本的な解決には至らない、というのが予防教育に連なる理念だ。プログラムによって子どもたちが学習目標に到達する過程が、心理学などの知見から科学的に示された」とは期待のこみえるだろう。いじめや不登校、さらには自殺といった深刻な問題の突破口となるのか。期待を込めて見守りたい。(久次米美)